



Sapporo
education and
culture hall
news

R a k u

66





「特集」

新たなスタートを切った 教文が見据える、 これからのカタチ

1年9ヶ月に及ぶ休館が明けた札幌市教育文化会館（以下、教文）。約5ヶ月かけて様々なリニューアルオープン記念事業が行われ、いよいよ4月から従来の教文が動き始めます。リニューアル後の教文はどうなっていくのか。今年予定されている様々な事業を見ていきましょう。

新たに生まれた 教文と市民の接点

休館中にこれまで教文が行ってきた事業は、施設が使えないことを逆に活用し、様々な会場で外部と連携した催しを積極的に行うことで、多くの新しい繋がりをもたらしました。今まで教文と接点が無かった市民も多く来場し、教文が気になる存在になった方も多いのではないのでしょうか。しかし、繋がりを作るだけでは関係がいずれ途切れてしまいます。そこで、2025年度は教文が気になりだした方たちが、今度は実際に教文へ足を運んでもらえるような事業を多面的に展開していきます。

素晴らしい舞台芸術を よりしっかりと 体験してもらいたい

休館中にも様々な取り組みを行ってきた伝統芸能。能楽ではこれまで『能楽なう』として2つの流派を見比べる能楽公演を行ってきましたが、もっと観たいというお声に対応できるように、それぞれの流派をしっかりと鑑賞していただけるものに変更し、タイトルも『教文能』へと変化。2025年度は京都金剛流を招き、定番の演目ながらほぼ札幌では行われたことなかった『熊野』を上演。さらに、新たな企画として日本を代表する声優による朗読と雅楽、そし

て宝生流の能による新感覚の能楽体験をお届けする『夜能』語り部たちの夜『船弁慶 後之出留之伝』を行います。休館中に行った『能楽展2023』『雅 vol.1 - Miyabi - CLASSIC×NOH』『石山緑地新能』で能楽の魅力に気づいた方たちの「観たい」という気持ちに『教文能』が寄り添い、堪能していただけるものとなっています。

市民とともに作る多様な プログラムをより充実させる

これまでにも行われていた「小中学生のための能楽入門」は今回から会場を研修室から小ホールの仮設能舞台に変更。研修室とは異なり、能舞台から得られる体験は他に類を見ないものとなるでしょう。能楽を体験できるのは子どもだけではありません。新たに「市民参加型ワークショップ「能楽大連吟」札幌」として、数ヶ月かけて市民が能楽「高砂」の謡を稽古し、発表会では能楽師とも共演するという、大人も参加できる企画が新たに始まります。

『子ども演劇ワークショップ』もさらなる進化を遂げます。昨年5月、札幌に誕生したジョブキタ北八劇場と連携して、同芸術監督を務める納谷真大氏による作品制作を教文で、発表公演を北八劇場で行うといった新たな取り組みで実施します。劇場それぞれの持ち味を組み

合わせることによって新たな体験をワークショップ参加者に提供します。またコロナ禍に開催し好評を得た『子ども体験新喜劇ワークショップ』も開催。観るだけでなく、体験できるラインナップもこれまでに以上に充実させていきます。

鑑賞体験をよりリアルに

全国の演劇人が短編作品で競う短編演劇祭と様々な演劇ワークショップが行われてきた『教文演劇フェスティバル』、通称『演フェス』。2022年に短編演劇祭のみ復活を遂げましたが、今年は様々なワークショップなども企画し、演フェスとしてはコロナ禍の影響もあり2019年以来的の完全復活を遂げます。さらに今回の短編演劇祭は原点回帰として、会場を小ホールに戻すことで、舞台上の熱量をよりダイレクトに観客へと届けます。

次の50年へ向けて

再来年2027年には教文がオープンして50年を迎えます。町並みや市民にとってひらかれた場としての教文のあり方も時代によって変化しています。新たな50年へ向かうため、教文は同じ場に留まらずに少しずつ進化を続けます。ここでは紹介しきれなかった事業もまだまだありますが、市民とともに新たなステージへと進む教文に是非ご期待ください。



©Erika Kusumi

子ども演劇ワークショップ

2025. 7.1[火]～11.3[月・祝]

会場 研修室、リハーサル室、ジョブキタ北八劇場

これまで子ども向け演劇ワークショップを行ってきた教文とジョブキタ北八劇場が、初めて共同でのワークショップを開催。公募によって集結する子どもたちと地元で活躍する俳優たちがワークショップを経て一緒に演劇を制作発表します。

実績のある2つの劇場による
コラボレーションが初めて実現！

教文演劇フェスティバル2025

2025. 8.28[木]～8.29[金] ほか

会場 小ホール ほか

今年は様々なワークショップなども企画し、演フェスとしてはコロナ禍になる前に開催した2019年以来、6年ぶりの完全復活を遂げます。今回の短編演劇祭は、原点復帰の小ホール開催！

全国からも注目される
教文演劇フェスが
ついに復活！
短編演劇祭も併せて開催！



他にも芸術文化公演・イベントを予定しております。2025年度の主催公演・イベントラインナップ詳細は下記にQRよりご確認ください。



©accie

ちいさなひとのためのオペラ 「銀河鉄道之夜」

2025. 6.28[土]

会場 小ホール



©中島和哉

小・中学生のための 能楽入門

2025. 8.15[金]、8.16[土]

会場 小ホール



©青木信二

人形浄瑠璃文楽

2025. 11.18[火]

会場 小ホール

主催公演・イベント
ラインナップはこちら

https://www.kyobun.org/event_schedule.html?k=main



公演・イベントに
関するお問い合わせ

札幌市教育文化会館 事業課
011-271-5822

9:00～17:00 第2・第4月曜日休（祝日の場合は翌営業日）



世阿弥が描き、能の王道とも言われる
忠義と悲哀の世界が札幌に降り立つ。

教文能 京都金剛流「熊野」

2025. 10.29[水]

会場 大ホール

古来より「飽きのこない面白さ」と評されてきた「熊野」。世阿弥が作り、定番作品ながら札幌では珍しい演目をぜひお楽しみください。「舞の金剛」と呼ばれる力強い舞にも注目です。



[出演]
金剛龍謹、茂山逸平ほか

市民参加型ワークショップ 大連吟札幌

2026年1月から開催予定
(ワークショップ5回・成果発表会開催予定)

会場 大ホール(簡易能舞台)

能楽「高砂」を数カ月かけて稽古して、発表会では観世流能楽師と共演して謡を披露します。どなたでも参加可能なワークショップですので、気軽に能楽の世界をお楽しみいただけます。

©HALCA photography



高砂を大人数で謡いあげる！
誰もが参加できる能の大連吟。

2025年度

札幌市教育文化会館主催公演 イベントピックアップ

今の教文だからできる
市民へ向けた多彩な催し

教文は1977年の開館から「伝統芸能の振興」と「市民の文化活動の支援」という2つの柱に力を入れて事業を展開してきました。リニューアル後も2つの柱はそのままに、より沢山の方に興味を持ってもらえるよう、市民一人ひとりの興味関心に合わせて選べる公演やイベントでラインナップを充実させました。このほかにも様々な公演・イベントを予定しております。新たに歩みだした教文へのご来館を心よりお待ちしております。



「能×声優」という異色のタッグ。
朗読を通して能の世界をより身近に。

教文能 夜の夜能～語り部たちの夜～ 「船弁慶 後之出留之伝」

2025. 10.31[金]

会場 大ホール

1つの演目を朗読で聴いてから能として観ることで、能の世界をより身近に楽しめる「夜能」。人気声優による朗読と雅楽、そして宝生流の能による新感覚の能楽体験をお届けします。

北海道教育大学札幌校芸術文化課程音楽コース卒業、同大学院修士課程修了。フィンランド国立シベリウス音楽院留学。札幌市民芸術祭奨励賞を新人音楽会と「Terra」弦楽四重奏団「ショスタコーヴィチ作曲弦楽四重奏曲全曲演奏会」シリーズにて受賞。室内アンサンブル Les pommes(レ・ポムポム)主宰。令和三年度札幌文化奨励賞受賞。



1) 第2回公演「フォリア 熱狂のスペイン」教文小ホールにて 舞台上にはシンボルの金りんごの木が
2) CLASSIC×NOH 一弦楽四重奏と能が織りなす新たな世界ー 3) 石山緑地薪能「あたら夜の月影一覽古考新ー」

室内楽奏者
山本聖子



術



化



Art
Culture
Human

06

誰よりも楽しんでながら挑戦し
まだ見ぬ芸術の魅力を伝える

ヴァイオリンを始めたのは母親に薦められて始めた習い事から。幼少の山本さんは発表会で行う合奏は好きではなかった。大学に進学するまでは別の道も考えていたが、進学を機に今まで得たことのない音楽知識と体験を通して、初めて楽しいと思えたと言う。それからは楽しそうなお仕事に挑戦するようになった。大学院時代、一人暮らし経験なし、外国語も堪能ではない状態ながら、フィンランド国立シベリウス音楽院へ留学。北欧トップクラスのレベルを誇るシベリウス音楽院では、周りの演奏技術に圧倒されながらも物怖じすることなくオーケストラや室内楽の授業を受け演奏旅行にも参加した。帰国後は先輩に誘われTerra(テラ)弦楽四重奏団に参加。札幌市民芸術祭奨励賞を受賞し、国内外での演奏機会を得たことは室内楽の素晴らしさをさらに深く知る契機となった。札幌コンサートホールKitaraが企画を募集する「Kitaraアーティスト・サポートプログラム」を知った山本さんは「なにか面白いことがやってみたい。」と以前から注目していたフレン

テバロックの演奏、そして音だけでなく視覚でも楽しんでもらおうと舞台演出家とともに企画を考案。見事コンサートの権利を獲得し、現在も続く室内アンサンブルLes pommes(レ・ポムポム)が鮮烈なデビューを飾った。Les pommesは弦楽器を中心に木管、鍵盤、声楽からなり、曲の構成やニーズで編成を変化させるグループとして活動を始めた。Les pommesでの活動が教文の目に留まり、能とのコラボレーション企画「雅 vol.1」に弦楽四重奏として出演。多くの反響を受け、続く「石山緑地薪能」にも出演が決定。野外での能との共演という、今まで経験のない内容に戸惑いながらも全力で挑み、石山緑地に集う満員の聴衆を大いに魅了した。「お能もバロック音楽も知っているようで実は知らないことばかりでした。そこに踏み込んで吸収し、自分に取り入れて表現することで、楽しさや感動をお客様と共有したいんです。」そう語る山本さんは、これからも新たな挑戦を続け、音楽と芸術の魅力を多くの人に届けていくことだろう。

TOPICS.1

リニューアルした教文。どこが変わった？

1年9ヶ月のリニューアル工事を行った教文。見た目はほとんど変わっていませんが、お客様がご利用される場所から裏舞台まで、実は色々なところが変わっています。大ホールでは、今まで2階席へ上がるには階段しかありませんでしたが、新たにホワイエにエレベーターを新設。さらに2階にはバリアフリートイレを設置、2階と中2階の間には車椅子の方でも行き来できるような階段昇降機装置も設置され、どなたでも座席までアクセスしやすくなりました。そして1998年以来、1100席全ての座席を更新。新しくなった座席で皆様の鑑賞体験をより豊かにお届けします。その他にも緞帳や能舞台などの改修が行われていたり、お客様に見えないところも含めると、さらにたくさんの改修が行われており、より安全に皆様にご利用いただける施設になりました。



TOPICS.2

教文演劇フェスティバル2025

『教文短編演劇祭』作品募集!

道内外で活躍する劇団やユニットが集まり、テーマに沿った20分の短編でしごきを削る演劇の祭典「教文短編演劇祭」が、新型コロナウイルス感染症の猛威や休館を乗り越え3年ぶりに復活。今回の舞台は原点回帰となる教育文化会館小ホール。5月下旬～6月上旬に行う台本審査を突破し、8月29日開催の本戦へと進めるのは4チーム。今年のテーマは「チョウ」。全国にいる短編演劇の猛者からのご応募をお待ちしています!



教文演劇フェスティバル2025 短編演劇祭 四ツ巴戦
(優勝劇団) 宇宙空地「グ、リ、コ」

募集期間
2025年4月18日(金)～5月9日(金)
※15:00必着

詳しくはHPをご覧ください
<https://kyobun.org/enfes-official/>

